

初年次生の大学生活への適応に関する調査報告 (1)

野波侑里、近藤伸彦、玉本拓郎*

要 旨

新入生の大学への早期適応は、大学生活に適応できず不登校となり退学する学生を減らし、学生が4年間を楽しく有意義に過ごすために、大学として取り組むべき重要な課題の一つである。本研究では、その解決に必要な基礎的なデータ収集の一環として、初年次生の大学生活への適応に関する実態調査をおこなう。具体的には、大手前大学の2011年度入学生を対象に、1年間に4回のアンケート調査を実施し、大学への適応に関する心理的变化の調査をおこなう。アンケート調査では先行研究をもとに、大学への適応に関する指標として①ソーシャルスキル、②自尊心、③大学生活(姿勢)、④大学生活(実際)の4つを使用する。

本稿では、4回のアンケート調査のうち2011年春学期に実施した3回(入学直後の研修前後と春学期末)について報告する。具体的には、初年次生全体についての集計結果および男女別・学部別の集計結果について報告をおこなう。

キーワード：初年次教育、新入生、適応感、自尊心、ソーシャルスキル

1. はじめに

新入生の大学への適応については、1960年代のスチューデントアパシーなど、以前から多くの議論がなされてきた。また近年においては、大学全入時代と言われる中で多様化した学生が入学し、さまざまな理由で大学に馴染めない学生が増えていることが報告されている(山田 2006、谷島 2005)。

大学適応に困難が生じる原因としては、主として学力面における適応困難と、人間関

*大手前大学 非常勤講師

係におけるコミュニケーション能力不足の2つが挙げられる。大学への不適応が続けば、不登校に陥りそのまま退学へと発展する例も多い。そのような学生を減らし、学生が4年間を楽しく有意義に過ごすために、入学後の早い時期に新入生を大学へ適応させることが望まれる。従来であれば本人の自助努力により大学への適応は行われてきたが、近年では大学がその一助を担う必要が出てきた。

大手前大学（以下、本学）では、学生が入学後の早い時期に大学に適応するための試みとして、毎年試行錯誤を重ねながらさまざまな取り組みを展開してきた。2007年度からは初年次教育の一環として、入学前オリエンテーション・入学前学習・新入生オリエンテーションをはじめとして、複数科目が深く連携した初年次必修科目や、それと連動した学習支援センターによる学生支援・学習支援など、さまざまな教育活動や支援を開発・実施・運営してきた（本田 2009、近藤 2009、奥田 2010）。

しかし、実際には大学へ適応できないまま不登校になり退学するケースもある。学生の大学への適応に関するより適切で効果的な対策をおこなうためには、まずは学生の実態を把握するための基礎的データを収集する必要がある。

また、初年次必修科目は授業への能動的な参加が重視され継続的な課題提出などが必要となるうえに、グループワークへの積極性なども求められるため、その成績は大学生活への適応に関する一面を反映しているといえるが、少なくとも2011年度初年次必修科目の春学期の成績をみると、性別や学部によって成績の分布に顕著な傾向が表れている。このことから、性別や所属学部による傾向をつかむことも適切な支援をおこなううえで重要と考えられる。

これらを踏まえ、本研究では学生の大学への適応に関する実態調査をおこなう。先述のとおり、学校適応に関する原因には学力面と心理面の両面があるが、本研究では特に学生の心理面に注目し、2011年度入学生を対象として年間4回のアンケート調査を実施する。アンケート調査では、学校適応感に関する指標として、先行研究（新垣 2010）にもとづき、①ソーシャルスキル、②自尊心、③大学生活（姿勢）、④大学生活（実際）の4つの指標を使用する。

本稿では、4回のアンケート調査のうち2011年春学期に実施した3回（入学直後の研修前後と春学期末）について報告する。具体的には、初年次生全体についての集計結果および男女別・学部別の集計結果について報告をおこなう。

2. 背景

本研究では、本学の初年次生を対象として、入学直後から春学期末までの大学生活への適応に関する調査をおこなう。本章ではその調査の前提として、本学の学生がどのよ

うな体制のもとで学生生活を送っているかを概観するため、本学への入学者受け入れの方針と教育課程編成・実施の方針について、入学直後の研修である「キックオフミーティング」のプログラム概要について、および学生の心理・学習面の大学適応をサポートするための学習・学生支援体制について述べる。

2.1 本学の入学者受け入れの方針と教育課程編成・実施の方針

アドミッションポリシーにて宣言されている本学の入学者受け入れの方針は下記のとおりである。

大手前大学は、大学の「建学の精神」「使命」等に共感し、親しく共に学ぶ意欲をもつ学生を心から歓迎します。本学は3学部を設置しており、学部ごとに入学者選抜を行っています。学生が入学後に自分の興味を確認したうえで、学部の枠を超えて自由に履修できるように「ユニット自由選択制」を導入しています。これは、「自分で創る専門性」という本学の新たな教育方針に基づいた、学生主体のシステムです。本学では、このような学習システムを理解し、次のいずれかに当てはまる学生であれば、心から歓迎します。

1. すでに学びたい分野がはっきりしており、本学でその分野に絞って深く学習したい学生
2. 入学後に自分の興味を確認したうえで、ひとつの分野を選んで深く学習したい学生
3. 特定の分野に限らず複数の学問領域を「主専攻+副専攻」として学んでみたい学生

すなわち、明確な目的を持って入学する学生もいれば、自分が何を学びたいかをまだ決定せずに入学する学生もいるなど、本学は多様な学生を受け入れているといえる。

入学後は、本学のカリキュラムポリシーによって、学生が「自分で作る専門性」を習得するための特色あるカリキュラムが編成されている。とくに初年次においては、その大学での学びの基礎力を養成する必修科目として「キャリアデザイン」「英語」「情報活用」を設けるなど、いわゆる初年次教育の充実を図っている。また初年次には、幅広い教養を身につけるためのベーシック選択科目、さらに専門的な学習への入り口としての「お試し科目」として専門教育科目を設け、3学部ともにすべての科目を自由に選択できるようにしている。すなわち、入学後に自己の興味を確認したうえで、時間のゆとりをもって専門分野を決め、学部の枠を超えて自由な履修を可能にする“Late-Specialization”の方針にもとづいたカリキュラム編成がなされている。このように、目

的意識においても多様な学生を受け入れた本学では、「3学部クロスオーバー」のコンセプトのもと、学生が自由にカリキュラムを設計できるようになっている。

2.2 入学直後の導入教育

本学では、2007年に学部改組を実施してから、全学部共通の初年次教育と入学直後の導入教育プログラムを開発・実施してきた。入学直後の導入教育では履修登録や学生生活における指導に加えて、2日間の研修「キックオフミーティング（以下、KOM）」を実施している。以下にそのプログラムの具体的な内容を紹介する。

毎年度試行錯誤を重ねてきたKOMは2011年度に5年目を迎えた。2011年度は、2010年度に実施した「自己の探求」プログラムを改編し、「自己理解を深めて自信を持つ」というテーマで、本学全学部の新入生785名を対象に2日間のプログラムを展開した。プログラムの目的は、「自己理解を深め、グループワーク体験を通して他者の自己理解に貢献し、自信を持つこと」とした。さらに、はじめて出会う人たちとあらゆるグループワークを実行することを通してコミュニケーションスキルの向上や、早期の大学生活へ適応することもねらいとなった。

KOMの2日間プログラムの要素は以下のとおりである。

《1日目》

- (1) オリエンテーション
- (2) 自己行動分析
- (3) グループ作り・相互自己紹介
- (4) グループディスカッション・合意形成
- (5) 異なる価値観の共有と相互理解

《2日目》

- (6) 個人によるアイデアの創出とグループによるアイデアの発案
- (7) グループ協働による問題解決
- (8) 他者理解とアドバイスカード交換
- (9) まとめと目標設定

本プログラムでは、講師はファシリテーターとしての役目を果たし、一方的な指導ではなく学生が主体的に行動することを促す役目を果たした。そのため、学生が主体的に行動を始めるまで学生を見守り、学生同士が互いにコミュニケーションを取り合う過程を尊重した。すなわち、プログラムの過程で自分自身を知り、他者の自己理解を助け、さらに他者の助けで自己理解を深めていく過程の中で、学生同士が互いに成長を促すことを目指した。

クラス編成は、全学生785名を22クラスに分け、1クラスは約30～40名とした。ファ

シリテーターは、本学の初年次教育の中心となる必修科目「キャリアデザイン」を担当する専任教員が担当した。また本学の2～4年次生のスチューデント・アシスタント(SA)が1クラスにつき2～3名配属されアシスタントを担当した。

担当教員は、このプログラムにおけるファシリテーションを習得するための3日間の研修へ事前に参加した。またSAも1日間の研修に参加してファシリテーションの方法を学んだ。

このように2011年度のKOMは、自己理解を深めて他者の自己理解に貢献するというテーマで行われたが、2日間を通してさまざまなグループワークをする中で、学生の大学生活への適応を促進するという観点も見逃すことはできない。

2.3 学生・学習支援体制

本学では、多様な学生に対応するため、学生支援と学習支援の両面からサポートを実施している。

学生支援では、学生課のスタッフと共にスクールカウンセラーと学生相談室のカウンセラーが、大学に適応しにくい学生の対応にあたっている。スクールカウンセラーは、必修科目の出席状況を確認して、不登校気味の学生の早期発見に取り組み、学生の担任であるアドバイザーとの連携を密に取りながら、問題を抱える学生に連絡を取り、相談に乗ることができる体制を整えている。

学習支援では、授業外支援としてチューター制度を導入している。図書館だけでなく必修科目のある月、水、金には自習室を開放し、本学の非常勤講師と本学および他大学の大学院生が担当するチューターによって、課題や自己学習をおこなう学生のフォローを行っている。初年次生が通学するいたみ稲野キャンパスの自習室は、1日あたり約50～100名の学生が利用している。多様な学生を迎えた昨今では、学力そのものの差はもちろん学習意欲の差も大きく、チューターによる指導は重要な役割を果たしている。また、自習室は学生にとっての大切な居場所となっているケースも多い。

2.4 大学への適応に関する学生の実態

本学の初年次生は、入学したのち以上のような体制のもとで大学生活を送っている。学生の大学への適応に関して何らかの適切な対策を行っていくにあたっては、まずこれを前提とした学生の実態を把握するための基礎的データを収集することが必要である。

本研究ではその一環として、適当な指標のもとで学生の大学生活への適応に関するアンケート調査をおこなうこととした。調査の時期としては、大学への適応を大きなねらいとしたKOMの効果測定の見点からKOMの前後1回ずつ、さらに学生の適応感が本学の教育体制のもとでどのように変化するかを測定するために春学期末と秋学期末に1回

ずつ、計4回の調査をおこなうこととした。次章から本調査の概要および結果について述べる。

3. 調査の概要

本章では、調査に用いた指標、調査時期および方法について述べる。

3.1 指標

本研究では、大学生活への適応に関して「ソーシャルスキル」「自尊心」「大学生活(姿勢と実際)」の3つの観点に注目し、先行研究(新垣 2010)に基づいて以下の4種類の指標を採用した。これらの指標に基づいたアンケートの質問項目については添付資料を参照されたい。

《ソーシャルスキル》

Goldsteinによる若者のための50のスキルチェックリスト(Goldstein 1980)にもとづき菊池が作成したソーシャルスキル尺度「KiSS-18(青年版)(菊池 2000)」を、本研究における「ソーシャルスキル」の指標とした。18の質問をそれぞれ5段階評価(最もネガティブな選択肢を1点、最もポジティブな選択肢を5点)で回答した合計点が「ソーシャルスキル」の得点となり、18点~90点に分布することになる。本指標の平均値は高校生男子が54.0、女子が53.5、大学生男子が56.4、女子が58.4といわれている(新垣 2010)。

《自尊心》

Rosenbergの全般的セルフエスティーム尺度の星野の邦訳(星野 1970)に基づいて菅がリッカート法による採点を用いたもの(菅 1984)を、本研究における「自尊心」の指標とした。10の質問をそれぞれ4段階評価(最もネガティブな選択肢を1点、最もポジティブな選択肢を4点)で回答した合計点が「自尊心」の得点となり、10点~40点に分布することになる。本指標の大学生男子の平均値は26.2点~28.6点、女子は24.1点~27.2点といわれている(新垣 2010)。

《大学生生活(姿勢)》

先行研究(石田 2009、中武 2005)をもとに新垣が作成した「学校に適応したい意識」に関する尺度(新垣 2010)を、本研究における「大学生生活(姿勢)」の指標とした。これは「どのように大学生生活を送りたいか」という意識についての指標である。8の質問

をそれぞれ5段階評価（最もネガティブな選択肢を1点、最もポジティブな選択肢を5点）で回答した合計点が「大学生活（姿勢）」の得点となり、8点～40点に分布することになる。

《大学生活（実際）》

「大学生活（姿勢）」と対になる8の質問から構成され、「実際にどのように学校へ適応していると自己評価しているか」を測定するための尺度である。8の質問をそれぞれ5段階評価（最もネガティブな選択肢を1点、最もポジティブな選択肢を5点）で回答した合計点を「大学生活（実際）」の得点となり、8点～40点に分布することになる。

3.2 時期と方法

2章で述べたとおり、2日間のKOMの体験が大学生活への適応感にどのような影響を与えるのか、またその後大学生活を経てそれがどのように変化するかを調査するため、KOMの前後、および春学期末（7月下旬）に同一のアンケート調査をおこなった。以下、本稿ではそれぞれの調査を「KOM前」「KOM後」「春学期末」と呼ぶこととする。ちなみに今後、秋学期末（2月上旬）すなわち1年次の終了時にも同一のアンケートを実施する予定である。

「KOM前」では、KOMの2日間のプログラムの開始直前に質問紙を配布し回答させた。「KOM後」では、2日間のプログラム終了直後に同様の質問紙を配布し回答させた。「春学期末」はWeb上でアンケートを実施した。初年次の必修科目である「情報活用」の授業時間内に実施し、欠席者には本学必修科目で使用しているLMS上で当アンケートについて告知し回答を促した。

いずれも回答は無記名としたが、上記3種類のアンケートの回答を人物ごとに紐付けるため、学籍番号を回答させた。ちなみに今回の集計では人物ごとの変化は分析しておらず、これは今後の課題である。

2011年度の1年生は3学部合わせて785名であるが、KOMに遅刻・早退・欠席した学生には回答の機会がなかったことや、春学期末の時点で大学へほぼ出席しなくなっている学生などがあるため、上記3回のアンケートの回答数はそれぞれ異なっている。

4. 結果

4.1 回答の集計

2011年度の1年生は785名である。各調査における有効回答数は表1のとおりである。指標によって有効回答数が異なるのは、それぞれの質問ですべてを適切に回答したものの

のみ採用しているためである。すなわち、いい加減に回答していると思われるもの、たとえばすべての質問に同じ回答をしている、などのデータは除外している。

これらのデータを男女別、学部別に分け単純集計をおこなった。各調査における男女別、学部別、および全体の有効回答数と指標の平均値は表2のとおりである。また、「KOM前」「KOM後」「春学期末」についての各指標の平均値の変化については図1～図12に示す。

ちなみに、「KOM前」「KOM後」は質問紙による調査であったため、学部・性別が正しく回答されていないデータがみられたことを断っておく。春学期末のWebアンケートでは、システムの仕様上性別・学部ともにすべてのデータにおいて正規に回答されている。

表1 各調査における有効回答数

| 調査 | | ソーシャル スキル | 自尊心 | 大学生活 (姿勢) | 大学生活 (実際) |
|------|-------|--------------|-----|--------------|--------------|
| KOM前 | 有効回答数 | 719 | 713 | 716 | 691 |
| | NA | 24 | 30 | 27 | 52 |
| KOM後 | 有効回答数 | 686 | 696 | 672 | — |
| | NA | 30 | 20 | 44 | — |
| 春学期末 | 有効回答数 | 673 | 673 | 673 | 673 |
| | NA | 9 | 9 | 9 | 9 |

表2 各調査における有効回答数と指標の平均値 (男女別・学部別・全体)

| 指標 | 調査 | 男性 | 女性 | 総合 文化 | メディ ア・芸術 | 現代 社会 | 全体 | |
|--------------|----------|------|------|----------|-------------|----------|------|------|
| ソーシャル スキル | KOM前 | n | 369 | 335 | 173 | 171 | 216 | 719 |
| | | mean | 51.6 | 52.9 | 51.8 | 52.3 | 52.6 | 52.3 |
| | KOM後 | n | 297 | 290 | 142 | 137 | 178 | 686 |
| | | mean | 58.6 | 58.6 | 57.8 | 58.4 | 59.6 | 58.6 |
| | 春学期 末 | n | 329 | 344 | 221 | 206 | 246 | 673 |
| | | mean | 53.6 | 55.8 | 54.6 | 55.1 | 54.5 | 54.8 |
| 自尊心 | KOM前 | n | 373 | 325 | 169 | 170 | 217 | 713 |
| | | mean | 22.1 | 21.4 | 21.6 | 21.9 | 21.9 | 21.8 |
| | KOM後 | n | 304 | 291 | 140 | 139 | 187 | 696 |
| | | mean | 23.7 | 22.9 | 23.4 | 23.2 | 23.3 | 23.3 |
| | 春学期 末 | n | 329 | 344 | 221 | 206 | 246 | 673 |
| | | mean | 23.0 | 21.8 | 22.1 | 22.6 | 22.4 | 22.4 |
| 大学生活 (姿勢) | KOM前 | n | 360 | 341 | 171 | 174 | 216 | 716 |
| | | mean | 30.6 | 32.9 | 32.0 | 32.2 | 31.4 | 31.7 |
| | KOM後 | n | 289 | 284 | 138 | 135 | 172 | 672 |
| | | mean | 31.8 | 33.0 | 32.2 | 32.5 | 32.5 | 32.3 |
| | 春学期 末 | n | 329 | 344 | 221 | 206 | 246 | 673 |
| | | mean | 30.1 | 32.5 | 31.6 | 31.6 | 30.9 | 31.4 |
| 大学生活 (実際) | KOM前 | n | 351 | 325 | 160 | 169 | 210 | 691 |
| | | mean | 25.5 | 28.4 | 27.1 | 27.4 | 26.5 | 26.9 |
| | KOM後 | n | — | — | — | — | — | — |
| | | mean | — | — | — | — | — | — |
| | 春学期 末 | n | 329 | 344 | 221 | 206 | 246 | 673 |
| | | mean | 25.5 | 28.0 | 26.9 | 27.4 | 26.2 | 26.8 |

初年次生の大学生活への適応に関する調査報告 (1)

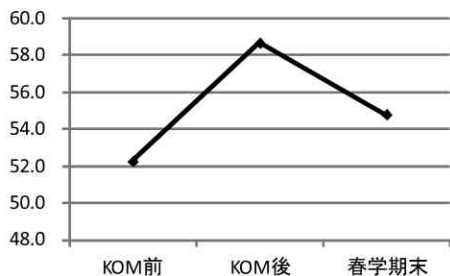


図1 「ソーシャルスキル」の変化(全体)

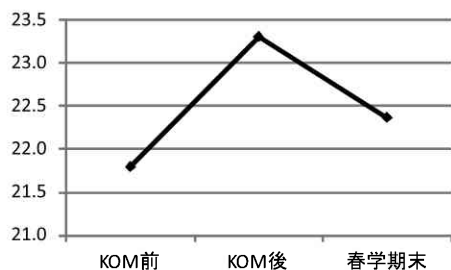


図2 「自尊心」の変化(全体)

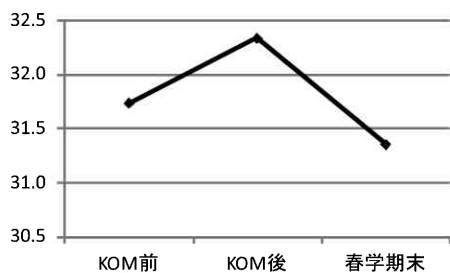


図3 「大学生活(姿勢)」の変化(全体)

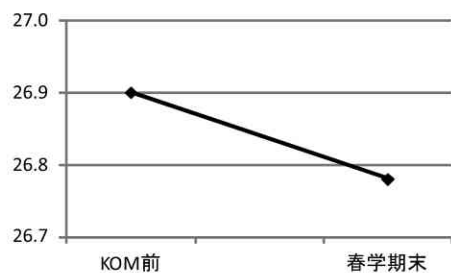


図4 「大学生活(実際)」の変化(全体)

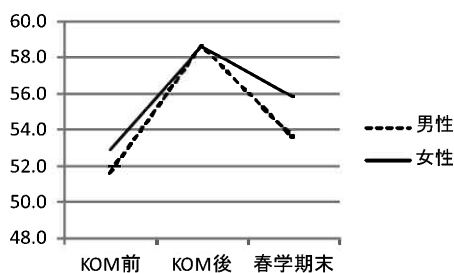


図5 「ソーシャルスキル」の変化(男女別)

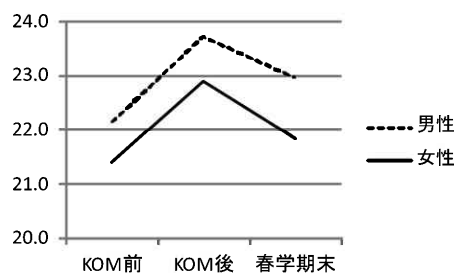


図6 「自尊心」の変化(男女別)

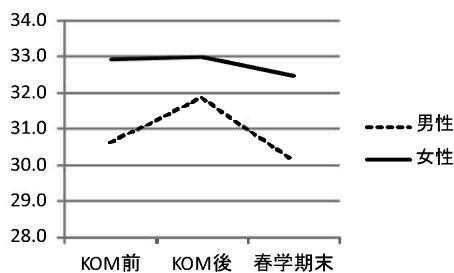


図7 「大学生活(姿勢)」の変化(男女別)

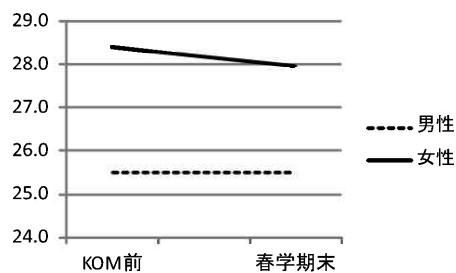


図8 「大学生活(実際)」の変化(男女別)

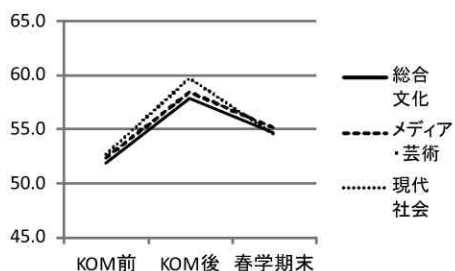


図9 「ソーシャルスキル」の変化 (学部別)

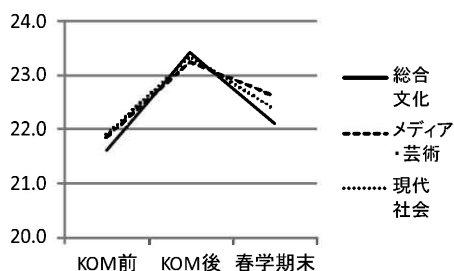


図10 「自尊心」の変化 (学部別)

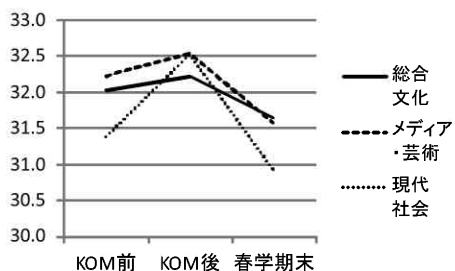


図11 「大学生生活(姿勢)」の変化 (学部別)

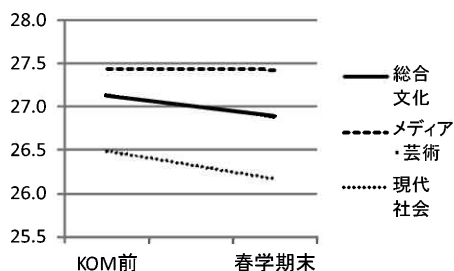


図12 「大学生生活(実際)」の変化 (学部別)

4.2 KOM前

《全体の結果》

「ソーシャルスキル」は52.3、「自尊心」は21.8、「大学生生活(姿勢)」は31.7、「大学生生活(実際)」は26.9であった。「ソーシャルスキル」については、3.1節で述べたとおり平均値が高校生男子54.0、高校生女子53.5、大学生男子56.4、大学生女子58.4といわれているので、一番低い高校生女子よりも低い数値となっている。

「自尊心」については、平均値は大学生男子で26.2~28.6、大学生女子で24.1~27.2といわれているので、平均的な大学生男子や女子よりも低い数値となっている。

「大学生生活(姿勢)」については、2010年度と同調査(新垣 2010)とほぼ同じ結果となっている。

《性別ごとの結果》

「自尊心」は男性のほうが高く、「ソーシャルスキル」「大学生生活(姿勢)」「大学生生活(実際)」は女性のほうが高い。

男性の「ソーシャルスキル」は51.6であるが、これは高校生男子の平均(54.0)や大学生男子の平均(56.4)と比べると低いといえる。「自尊心」は22.1であるが、これも大

学生男子の平均 (26.2～28.6) と比べると低いといえる。

女性の「ソーシャルスキル」は52.9であるが、これは高校生女子の平均 (53.5) や大学生女子の平均 (58.4) と比べると低いといえる。「自尊心」は21.4であるが、同様に大学生女子の平均 (24.1～27.2) と比べると低いといえる。

《学部別の結果》

「ソーシャルスキル」は総合文化学部が51.8、メディア・芸術学部が52.3、現代社会学部が52.6であった。いずれの学部においても高校生女子の平均 (53.5) よりも低い結果となっている。

「自尊心」は総合文化学部が21.6、メディア・芸術学部が21.9、現代社会学部が21.9であった。この指標も大学生男子の平均 (26.2～28.6) や大学生女子の平均 (24.1～27.2) と比べると低い結果となっている。学部間の大きな違いはないといえる。

「大学生活 (姿勢)」は総合文化学部が32.0、メディア・芸術学部が32.2、現代社会学部が31.4であった。この指標も学部間における大きな違いはない。

「大学生活 (実際)」は総合文化学部が27.1、メディア・芸術学部が27.4、現代社会学部が26.5であった。この指標も他の指標と同様に学部間における大きな違いはない。

4.3 KOM後

「KOM後」では「大学生活 (実際)」についての質問群を用意していないので、この指標の結果はない。

《全体の結果》

「ソーシャルスキル」は58.6、「自尊心」は23.3、「大学生活 (姿勢)」は32.3であった。図1～4からもわかるように、どの指標においても「KOM前」の結果よりも高くなっている。

「ソーシャルスキル」は大学生男子の平均 (56.4) や大学生女子の平均 (58.4) よりも高くなっている。また、「自尊心」は大学生男子の平均 (26.2～28.6)、大学生女子の平均 (24.1～27.2) よりも低いが、この値に近づいている。これらの上昇はKOMの影響が大きいと考えられる。どのような点が影響を与えているかをこれらのデータから指摘することは難しいが、少なくともこうした取り組みに一定の効果があるということはいうことができる。

《性別ごとの結果》

男性と女性を比べると「ソーシャルスキル」はほとんど同等だが、「自尊心」は男性

が高く、「大学生活（姿勢）」は女性が高くなっている。

男性は「ソーシャルスキル」が58.6、「自尊心」が23.7、「大学生活（姿勢）」が31.8であった。「KOM前」と比べると、「ソーシャルスキル」は51.6から58.6と7.0ポイント上昇している。「自尊心」は22.1から23.7と1.6ポイント、「大学生活（姿勢）」は30.6から31.8と1.2ポイント上昇している。

女性は「ソーシャルスキル」が58.6、「自尊心」が22.9、「大学生活（姿勢）」が33.0であった。「KOM前」に比べて、「ソーシャルスキル」は52.9から58.6と5.7ポイント、「自尊心」は21.4から22.9と1.5ポイント、「大学生活（姿勢）」は32.9から33.0と0.1ポイント上昇している。

変化のようすは図5～8のとおりである。「ソーシャルスキル」については、「KOM前」では女性のほうが高かったが、「KOM後」にこれが同等まで伸びたことは男性の伸び率が女性よりも大きかったことを示しており、特徴的な点である。

《学部別の結果》

「ソーシャルスキル」は総合文化学部が57.8、メディア・芸術学部が58.4、現代社会学部が59.6であった。3学部の中では現代社会学部が一番高い結果となっている。図9～11からわかるようにいずれの学部も「KOM前」から上昇しているが、現代社会学部は52.6から59.6と7.0ポイント上昇しており他の2学部に比べ伸び率が一番大きい。

「自尊心」は総合文化学部が23.4、メディア・芸術学部が23.2、現代社会学部が23.3であった。学部における違いはほとんどないといえる。

「大学生活（姿勢）」は総合文化学部が32.2、メディア・芸術学部が32.5、現代社会学部が32.5であった。現代社会学部は31.4から32.5と1.1ポイント上昇しており、他の2学部に比べてくに伸び率が大きい。

どの指標についてもいずれの学部も上昇しているが、「ソーシャルスキル」「大学生活（姿勢）」における現代社会学部の伸びが他の2学部より大きい点が特徴的である。

4.4 春学期末

《全体の結果》

「ソーシャルスキル」は54.8、「自尊心」は22.4、「大学生活（姿勢）」は31.4、「大学生活（実際）」は26.8であった。図1～4からわかるように、いずれの指標においても「KOM後」の結果よりも低くなっている。ただし、「ソーシャルスキル」と「自尊心」は「KOM前」よりは高い。「大学生活（姿勢）」と「大学生活（実際）」は「KOM前」よりも低くなっている。

《性別ごとの結果》

男性の「ソーシャルスキル」は53.6、「自尊心」は23.0、「大学生活（姿勢）」は30.1、「大学生活（実際）」は25.5であった。図5～8からわかるように、「ソーシャルスキル」と「自尊心」は「KOM後」よりも下がっているが、「KOM前」よりも高い。「KOM前」に比べて、「ソーシャルスキル」は51.6から53.6と2.0ポイント、「自尊心」は22.1から23.0と0.9ポイント上昇している。「大学生活（姿勢）」は30.6から30.1と「KOM前」よりも0.5ポイント低くなっている。「大学生活（実際）」はほとんど変化がなかった。

女性の「ソーシャルスキル」は55.8、「自尊心」は21.8、「大学生活（姿勢）」は32.5、「大学生活（実際）」は28.0であった。「ソーシャルスキル」と「自尊心」、「大学生活（姿勢）」の変化のパターンは男性と同様である。「大学生活（実際）」は男性と異なり「KOM前」よりも低くなっている。「KOM前」に比べて、「ソーシャルスキル」は52.9から55.8と2.9ポイント、「自尊心」は21.4から21.8と0.4ポイント上昇している。反対に「大学生活（姿勢）」は32.9から32.5と0.4ポイント、「大学生活（実際）」は28.4から28.0と0.4ポイント低くなっている。

男性と女性を比べると「自尊心」は男性が高く、それ以外の他の3つの指標はすべて女性のほうが高くなっているのは「KOM前」「KOM後」と同様である。「KOM前」から「春学期末」に対する変化については、「ソーシャルスキル」は男性が2.0ポイント、女性が2.9ポイント上昇しており、女性のほうが伸びている。「自尊心」は男性1.9ポイント、女性0.4ポイントで男性のほうが伸びている。一方で、「大学生活（姿勢）」は男性0.5ポイント、女性0.4ポイントと0.1ポイント男性の下降が大きい。平均値の結果においても上昇あるいは下降の幅においても「ソーシャルスキル」「大学生活（姿勢）」「大学生活（実際）」は女性のほうが結果が良く、「自尊心」のみ男性のほうが結果が良かった。

《学部別の結果》

「ソーシャルスキル」は総合文化学部が54.6、メディア・芸術学部が55.1、現代社会学部が54.5であった。総合文化学部と現代社会学部は同等でメディア・芸術学部はそれより約0.5ポイント高い。「自尊心」は総合文化学部が22.1、メディア・芸術学部が22.6、現代社会学部が22.4であった。メディア・芸術学部 비해総合文化学部は約0.5ポイント低い。「大学生活（姿勢）」は総合文化学部が31.6、メディア・芸術学部が31.6、現代社会学部が30.9であった。総合文化学部とメディア・芸術学部は同等で現代社会学部はそれより0.5ポイント低い。「大学生活（実際）」は総合文化学部が26.9、メディア・芸術学部が27.4、現代社会学部が26.2であった。メディア・芸術学部が一番高く、総合文化学部、現代社会学部の順となっている。いずれの指標においても「KOM後」の結果と比べると低くなっている。

図9～12からわかるように、「KOM前」の結果と比べると、いずれの学部も「ソーシャルスキル」と「自尊心」は高く、「学校生活（姿勢）」と「学校生活（実際）」は低くなっている。「ソーシャルスキル」は現代社会学部の変化の仕方が他の2学部よりも大きく、「KOM前」と「KOM後」では一番高かったが「春学期末」には一番低くなっている。「自尊心」では総合文化学部の変化が一番大きく、「KOM後」の結果が一番高いが、「春学期末」では一番低くなっている。「大学生生活（姿勢）」をみると現代社会学部が一番大きく変化している。「KOM前」が一番低かったのが「KOM後」には総合文化学部よりも高くなり、メディア・芸術学部と同じとなった。しかし、「春学期末」には一番低くなっている。「大学生生活（実際）」は総合文化学部と現代社会学部は下降しているが、メディア・芸術学部はほぼ変化がない。

ひとつひとつの調査の結果においては学部間に大きな違いはみられないが、変化のパターンに注目すると若干の差がみられる。「ソーシャルスキル」と「大学生生活（姿勢）」では現代社会学部が比較的大きく変化しており、「自尊心」では総合文化学部が比較的大きく変化している。「大学生生活（実際）」では総合文化学部と現代社会学部は下降しているが、メディア・芸術学部はほとんど変化していない。

4.5 まとめ

大学入学時の「ソーシャルスキル」や「自尊心」をみると、一般的な高校生よりも低いといえる。しかし、KOMの後にはこれらの数値は一般的な大学生と変わらない値となっていた。つまり、このような取り組みは学生の「ソーシャルスキル」や「自尊心」にプラスの影響を与えることができるということがいえる。

ただし、「春学期末」にはいずれの指標も「KOM後」より下がっている。とくに「大学生生活（姿勢）」と「大学生生活（実際）」は「KOM前」よりも低くなっている。

性別では「ソーシャルスキル」において、「KOM後」に男性が女性と同等まで上昇したのを除けば、「自尊心」は男性が、それ以外は女性のほうがどの時点においても高い点特徴的である。

学部別ではそれぞれの調査の時点をみるとどの学部も大きな差はないが、「KOM前」から「春学期末」までの変化のパターンをみるとそれぞれの指標において学部の差がみられる。「ソーシャルスキル」と「大学生生活（姿勢）」では現代社会学部が、「自尊心」では総合文化学部が他の学部に比べ上昇・下降の変動が比較的大きく、「大学生生活（実際）」では総合文化学部・現代社会学部が下降しているのに対しメディア・芸術学部はほとんど変化していない。

これらの結果はアンケート結果の単純集計であり、学生が感じる大学への適応感に関する実態についての基礎的なデータである。これらを実際の成績や授業内外における学

習状況、大学生活への積極性などと関連付けて解釈していくことが今後の課題である。

5. おわりに

本稿では、本学の学生の大学生活に対する適応に関して、①ソーシャルスキル、②自尊心、③大学生活（姿勢）、④大学生活（実際）の4つの指標にもとづき、KOM前後と春学期末の3回アンケート調査をおこなった結果について集計し報告した。

今後、秋学期末のアンケート結果を加え年間を通じた結果を報告する予定である。さらには、個人別の変化や、有意な変化が生じているかの統計的検定、学生の学習状況や成績による群に分類したときの分析、リテンション率との関係についての分析などをおこない、学生の大学への適応に関しての適切な対策へとつなげていきたい。

参考文献

- 新垣円, 石毛弓, 伊藤めぐみ, 奥田雅信, 近藤伸彦, 竹内正和, 本田直也, 正田浩三, 吉川博行 (2010) 学校適応を目指した新入生オリエンテーション「自己の探求」効果の測定, 『初年次教育学会第3回大会発表要旨集』, 90-91.
- 石田靖彦 (2009) 学校適応感尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討—生徒評定と教師評定を用いた他特性—他方法相関行列からの検討—, 『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』, 愛知教育大学教育実践総合センター, 12, 287-292.
- 奥田雅信, 近藤伸彦, 野波侑里, 本田直也 (2010) 大手前大学における初年次教育の取組 (報告), 『大手前大学CELL教育論集 第2号』, 大手前大学CELL教育研究所, 1-6.
- 菊池章夫 (2000) KiSS-18の12年, 日本性格心理学会大会発表論文集』, 8, 26-27.
- 近藤伸彦, 中島彰子, 毛利美穂, 奥田雅信, 本田直也, 石毛弓 (2009) 多様な学生に対応する初年次教育プログラム—入学前教育からはじまる一貫した学習支援—, 『初年次教育学会第2回大会発表要旨集』, 92-93.
- 近藤伸彦, 中島彰子, 毛利美穂 (2009) 学生を放っておかない学習支援, 『日本リメディアル教育学会第5回大会予稿集』.
- Goldstein AP, Sprafkin RP, Gershaw NJ, Klein P (1980) Skill Streaming the Adolescent, Research Press Company (Champaign, IL).
- 菅佐和子 (1984) SE (Self-Esteem) について, 『看護研究』, 17(2), 117-122.
- 谷島弘仁 (2005) 大学生における大学への適応に関する検討, 『人間科学研究 第27号』文教大学人間科学部, 19-27.
- 中武章子, 佐藤静一 (2005) 高校生における教師への心理的距離と学校適応に関する研究, 『久留米大学心理学研究』, 4, 53-60.
- 星野命 (1970) 感情の心理と教育(2), 『児童心理』, 24(8), 1445-1477.
- 本田直也, 奥田雅信, 石毛弓, 近藤伸彦 (2009) 学生の多様化に対応する初年次教育システムの構築と実践—全ての学生に教育の質を保証するために—, 『大学教育学会誌』, 31(2), 92-95.
- 山田ゆかり (2006) 大学新入生における適応感の検討, 『名古屋文理大学紀要』, 6, 29-36.

添付資料) 大学生活への適応に関するアンケート項目

以下に実際のアンケート項目を記載する。KOMの前後には質問紙で、春学期末にはWebベースでそれぞれアンケートを実施したため、設問文等の表現は多少異なるが、意味合いとしては全く同一である。

【「ソーシャルスキル」に関する設問】

まず初めに、あなたのコミュニケーションの様子についてお伺いします。(1)～(18)のそれぞれについて、あなたの自己評価に最も近いと思うものを選択して下さい。(選択肢は「いつもそうでない」「たいていそうでない」「どちらともいえない」「たいていそうだ」「いつもそうだ」の5つ)

- (1) 他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか。
- (2) 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。
- (3) 他人を助けることを、上手にやれますか。
- (4) 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。
- (5) 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。
- (6) まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。
- (7) こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。
- (8) 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。
- (9) 生活や学習をするときに、何をどうやったらよいか決められますか。
- (10) 他人が話しているところに、気楽に参加できますか。
- (11) 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。
- (12) 生活や学習の上で、どこに問題があるかすぐにつけることができますか。
- (13) 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。
- (14) あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。
- (15) 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。
- (16) 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。
- (17) まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていけますか。
- (18) 生活や学習の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。

【「自尊心」に関する設問】

次に、あなたが自分自身についてどう感じているかお伺いします。(1)～(10)のそれぞれについて、あなたの今の気持ちに最も近いと思うものを選択して下さい。(選択肢は「ちがう」「ややちがう」「ややそう」「そう」の4つ)

- (1) 私はすべての点で自分に満足している。
- (2) 私はときどき自分がまるでだめだと思う。
- (3) 私は自分にはいくつか見どころがあると思っている。
- (4) 私はたいていの人がやれる程度には物事ができる。
- (5) 私はあまり得意に思うことがない。
- (6) 私は時々、たしかに自分が役立たずだと感じる。
- (7) 私は少なくとも、自分が他人と同じレベルに立つだけの価値のある人間だと思う。
- (8) もう少し自分を尊敬できたならばと思う。
- (9) いつでも自分を失敗者だと思いがちだ。
- (10) 私は自分に対して前向きな態度をとっている。

【「大学生生活（姿勢）」に関する設問】

次に、学校生活についてどう感じているかお伺いします。(1)～(8)のそれぞれについて、あなたの今の気持ちに最も近いと思うものを選択して下さい。(選択肢は「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」「どちらともいえない」「どちらかといえばそう思う」「そう思う」の5つ)

- (1) 授業／研修が始まる時間には席につきたい
- (2) 私語をせずに授業／研修を受けたい
- (3) 授業の予習をしたい
- (4) 将来のことを考えて授業を選択したい
- (5) 学校で、友人と食事を食べたい
- (6) 自分自身のことを学校の友達に話したい
- (7) 進路について学校の友達と相談したい
- (8) どのような職業が自分に合っているのか調べたい

【「大学生生活（実際）」に関する設問】

最後に、実際の学校生活の様子についてお伺いします。(1)～(8)のそれぞれについて、あなたの普段の様子に最も近いと思うものを選択して下さい。(選択肢は「いつもそうでない」「たいていそうでない」「どちらともいえない」「たいていそうだ」「いつもそうだ」の5つ)

- (1) 授業／研修が始まる時間には席についている
- (2) 私語をせずに授業／研修を受けている
- (3) 授業の予習をしている
- (4) 将来のことを考えて授業を選択している
- (5) 学校で、友人と食事を食べている
- (6) 自分自身のことを学校の友達に話している
- (7) 進路について学校の友達と相談している
- (8) どのような職業が自分に合っているのか調べている